

九鬼水軍の栄光と輝き その1

* 九鬼氏に関しては、嘉隆が織田信長に仕える以前の資料が少なく、ここでは一般的に知られている説を中心に、一部異説も紹介しています



九鬼嘉隆

九鬼水軍の長・九鬼嘉隆とは？

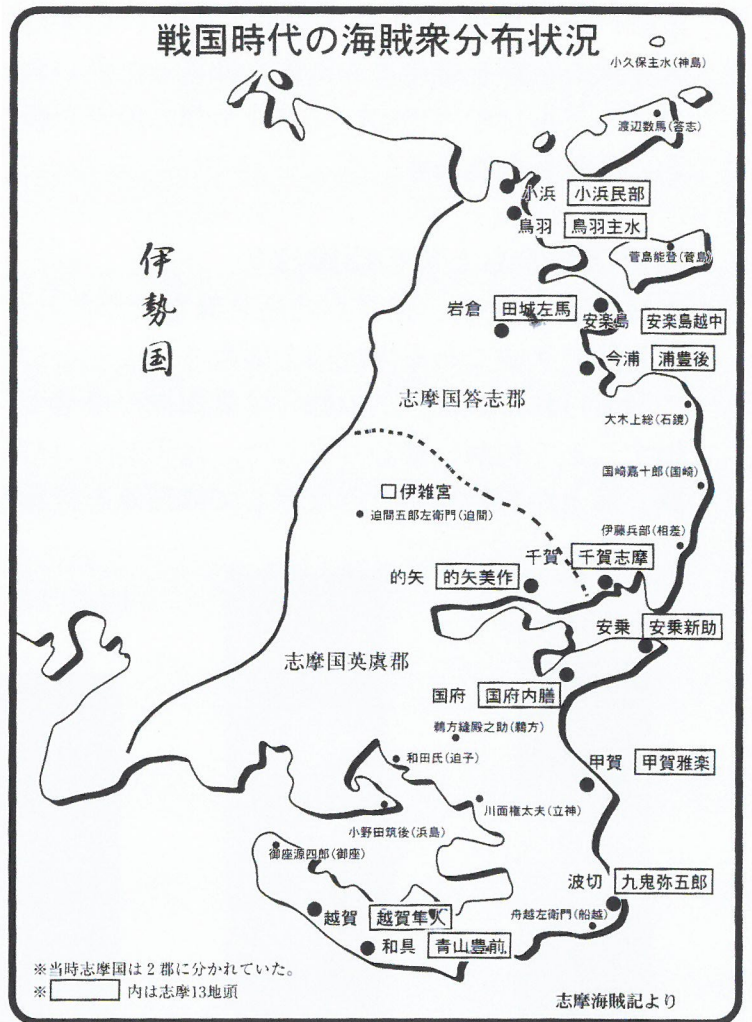
「九鬼水軍」の隆盛は、戦国期の武将・九鬼嘉隆の登場に始まります。嘉隆は志摩の一地頭衆（海賊衆）として身を起し、織田信長や豊臣秀吉の水軍の将として活躍、志摩国3万5千石の禄を得ました。

九鬼氏の出自は？

九鬼氏の出自は、南北朝時代に藤原隆信が紀伊国九鬼浦に築城して九鬼隆信を名乗ったとする説が有名ですが、熊野八庄司説、熊野別当末裔説など異説が多く、詳しくは解明されていません。

波切・田城への進出の経緯は？

家伝書では、紀州九木（鬼）浦（三重県尾鷲市九鬼町）から志摩波切（志摩市大王町波切）の川面氏に養子に入った隆良が周辺の勢力と戦い、隆基・隆次を経て泰隆の代に志摩国加茂郷岩倉村（鳥羽市岩倉町）の田城に城を築き、本拠を移したとされています。しかし隆良には子がなく、英虞郡和具（志摩町和具）の青山豊前の次男を養子にし、これが波切九鬼2代目の隆基となったとしています



嘉隆誕生の頃の様子？

嘉隆は天文11年（1542）5代定隆の二男として波切城で生まれました。答志郡の田城城では、定隆の長男・浄隆が生まれています。嘉隆が生まれた頃の九鬼家は4代泰隆が当主で「志摩十三地頭」と呼ばれた地頭衆の一勢力で、志摩国では「海賊衆」と呼ばれる海上での戦闘に優れた勢力が各地に存在していました

織田信長に仕えた経緯は？

永禄3年（1560）、志摩の地頭12人が伊勢国司・北畠具教の援助を受けて田城城を攻めました。嘉隆は城主浄隆とともに戦いますが、浄隆は戦の最中に死亡します。浄隆の子・澄隆を支えたものの、城主を失った九鬼側は戦意を失い敗退、朝熊山へ逃亡しました。その後、嘉隆は滝川一益の仲介で桶狭間の戦いを制した織田信長に仕えたとされています。

異説として、戦国時代初期に九鬼氏はすでに伊勢北畠氏に仕えてましたが、北畠氏の勢力が弱まると、織田信長の幕下に入りました。信長が北畠氏を侵攻した際、当時の当主であった九鬼嘉隆は織田勢を後ろ盾に、志摩国一円を手中に収めたといわれています。

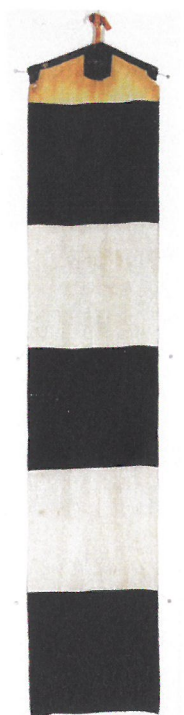
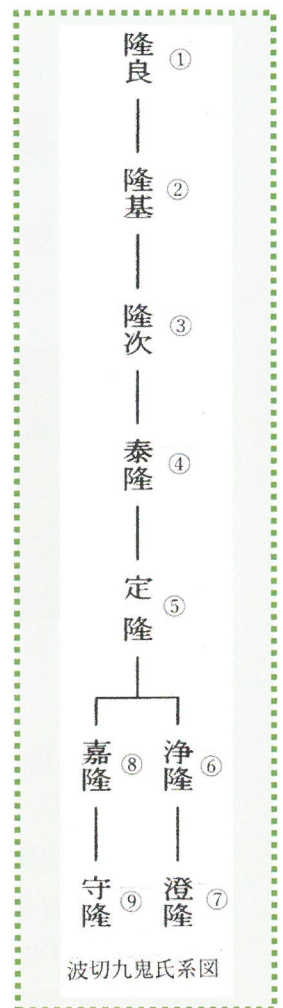
嘉隆が家督を継いだ経緯は？

志摩の地頭を次々と倒した嘉隆に対し、信長は志摩国の領有を認め、九鬼氏の家督を継ぐように取り計らったといわれていますが、信長没後の天正11年（1583）に嘉隆が甥の澄隆を殺して家督を奪ったという説もあります。

織田信長のもとでの活躍は？

永禄12年（1569）、信長が北畠具教を攻めたとき、嘉隆は水軍を率いて北畠の支城である大淀城を陥落させるなどの活躍をし、正式に織田家家臣団の一員として迎えられました。この戦いは織田側が優勢で、信長が次男の信雄を北畠家の養子に差し出すことで和解、終わりました。天正2年（1576）、信長が伊勢長島の一方向一揆を鎮圧する際、海上から射撃を行うなどして織田軍を援護し、敵陣攻略に活躍しました。

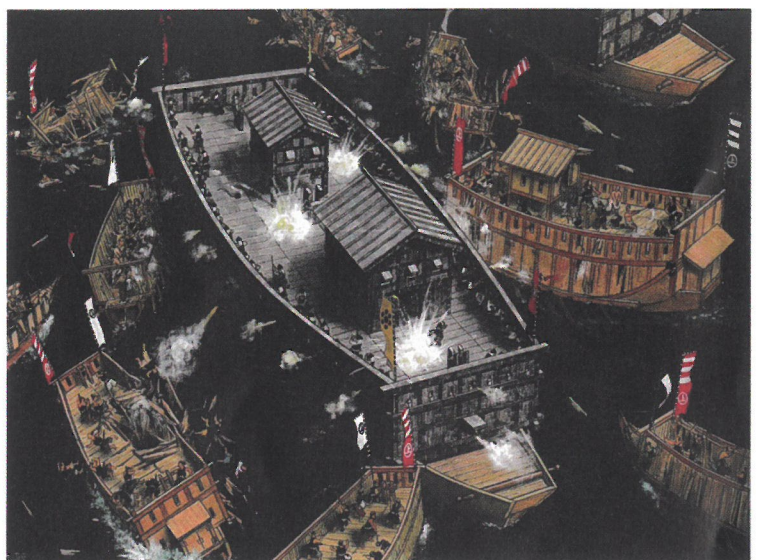
このように頭角を現した九鬼嘉隆と九鬼水軍を、織田信長は最強の敵・石山本願寺との戦いに投入してゆきます。



白絹地に三引間軍旗（九鬼氏旗）
白地に紺で一の字を三本染め出した、いわゆる三引間紋の軍旗。やはり九鬼家旗所用と伝える。



絹地赤絹染分三巴紋旗（九鬼氏旗）
九鬼嘉隆所用と伝えられる戦陣用の長大な旗、赤地に九鬼家の定紋三巴紋が白く染め抜かれているが、この三巴紋は熊野別当家をあらわすという。



第二次木津川口の戦いのイメージ図（村上水軍博物館提供）

天正六（1578）年、大阪湾の木津川河口で、嘉隆率いる織田水軍と、本願寺教団にむかう毛利水軍との戦いが行われた。信長が嘉隆に命じて建造させた「鉄甲船」はその威力を発揮、毛利水軍を撃退し勝利した。これにより、石山本願寺は信長と講話を結ぶことになり、九鬼水軍の名を全国に知らしめた。

九鬼水軍の栄光と輝き その2

※信長が本能寺の変で亡くなると、九鬼嘉隆はその後実権を握った羽柴(豊臣)秀吉に従い水軍の将として重用されます。功績が認められ、志摩国3万5千石の大名となります。

鳥羽城はどんな城で、完成したのはいつ?

嘉隆は天正13年(1585)に従五位下・大隅守に叙位・任官したのを契機に鳥羽城の築城に着手し、文禄3年(1594)に完成します。鳥羽城は周囲が海に囲まれ、大手水門が海側へ向いた珍しい「海城」でした。現在は石垣が当時の面影を残しています。



鳥羽城之絵図(鳥羽市立図書館蔵)



日本丸模型(鳥羽市個人蔵)

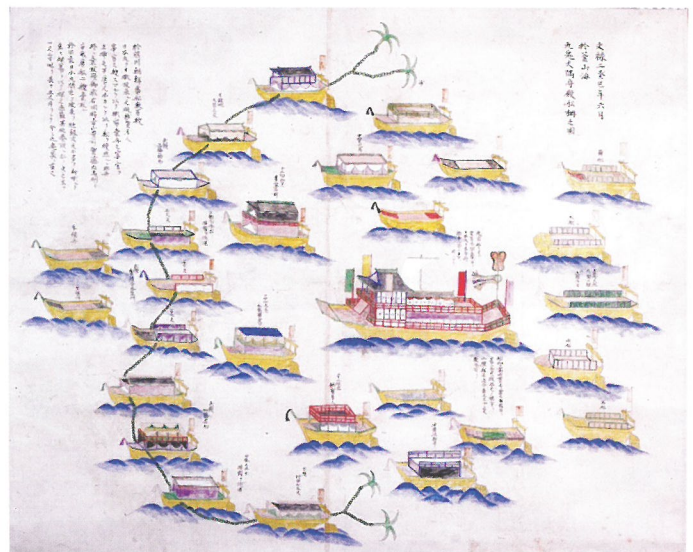
文禄の役に出陣した嘉隆の船は?

嘉隆が天正20年(文禄元年、1593)に建造した巨船は、当初は「鬼宿丸」と命名。名護屋城へ回航した際に、秀吉が、最も優れた船として「日本丸」に改名したといわれます。全長151.5尺(約33.6m)、全幅39尺(約11.7m)、甲板上に三層の楼閣を設け、大筒を3門備えた当時としては類を見ない巨船で、文禄の役では九鬼水軍の指揮・司令船としての役割を果たしました。

なぜ、大きな船を造ったのか?

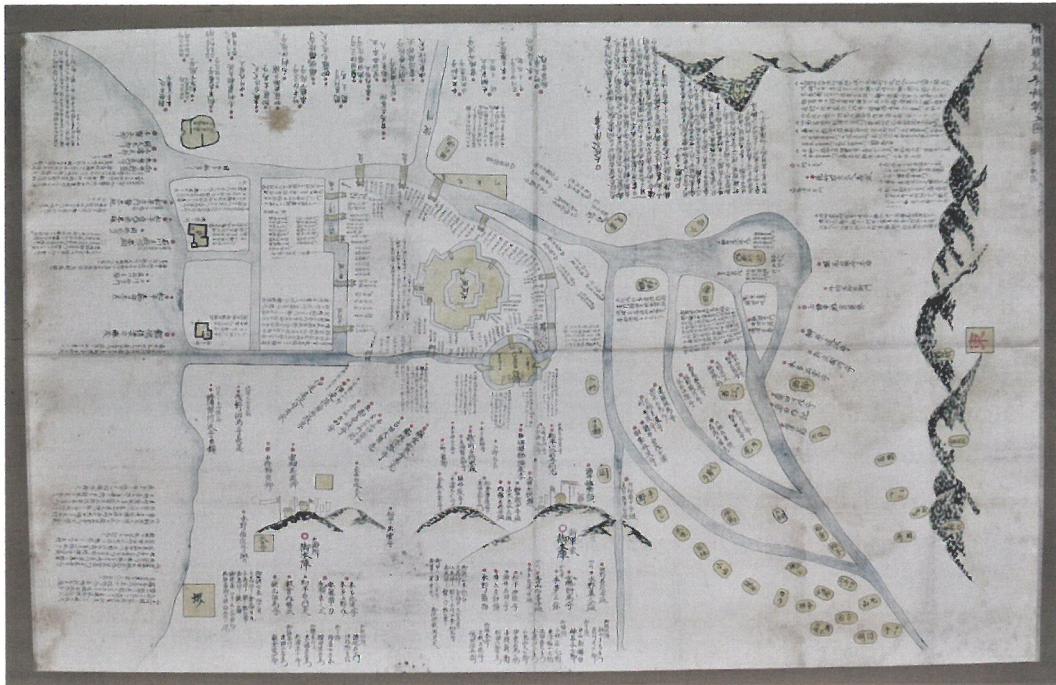
秀吉は文禄の役において、有能な水軍の九鬼嘉隆を豊臣水軍の指揮・統括する立場である「船奉行」に抜擢しました。また豊臣水軍の先陣にも選ばれたため、兵員1500人、総員9200人を率いて30数隻の艦隊で突出しその旗艦として日本丸を建造したと思われます。

釜山海九鬼大隅守殿
船柵の図
出典:三田市史通史1



なぜ、嘉隆は慶長の役には出陣しなかったのか?

嘉隆は文禄の役の論功行賞が低かったことを憤り、嫡子守隆に家督を譲って第一線から退いたともいわれています。また、豊臣水軍の戦術変更に伴い、準備はしていたものの、出陣する機会がなかったのかもしれませんが。慶長の役での九鬼水軍の動向については不明な点が多く、解明されていません。



摂州大坂冬の陣図

嘉隆と守隆が関ヶ原の戦いで敵味方に分かれて、戦ったのはなぜ？

慶長5年（1600）関ヶ原の戦いが起きると嘉隆は西軍に、守隆は東軍に与しました。このように肉親が敵味方に分かれる例は他家でも見られ、どちらが勝っても自家を存続させるという戦略だったといわれています。

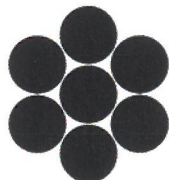
守隆が東軍総帥・徳川家康に従い会津に赴いている間に、嘉隆は守備が手薄の鳥羽城を堀内氏善と共に奪取、伊勢湾の海上封鎖を行い、安濃津城の戦勝に貢献、その後引き返した守隆とも戦いましたが、関ヶ原の本戦で西軍が敗れると、鳥羽城を放棄して答志島に逃亡したとされています

嘉隆と守隆の家紋が違うのはなぜ？

嘉隆の時代の九鬼家の家紋は「左三ツ巴」で、「七曜」は守隆の代に定められたといわれています。なぜ家紋を変更したかは諸説伝えられていますが、詳しくはわかりません。ちなみに三田藩は「七曜」を、綾部藩は「左三ツ巴」を主に使用しています。



左三ツ巴紋 九鬼嘉隆



七曜紋 九鬼守隆

家康に助命が認められたのに、嘉隆はなぜ自刃したのか？

守隆は家康に父の助命を嘆願し、功績が考慮され承されたようです。ところが守隆の急使が着く前に、九鬼家を案じた家臣の豊田五郎右衛門が独断で嘉隆に切腹を促し、これを受け入れ自害したとされています。その首級は家康のいる伏見城に送られましたが、途中で守隆の急使が確認し、守隆は激怒して豊田を斬首したと伝えられています。

久隆は、なぜ三田に移封されたのか？

守隆は鳥羽城主として5万6千石の大名となります。後継者を仏門にいた5男久隆にしようとしたところ、3男の隆季から猛反発をうけ家督争いとなりました。

守隆の死後も家督争いは続き、幕閣（江戸幕府）の裁定により、代々守ってきた志摩国の領地を失い、久隆は摂津国三田藩3万6千石に、隆季は丹波国綾部藩2万石に移されました。九鬼氏は水軍力の輝きを失い陸に上りましたが、その後は明治維新までそれぞれの領地で存続しています。ただいま、三田ふるさと学習館（旧九鬼家住宅資料館隣）で企画展示「九鬼家御家騒動」を行っておりますので、ご覧いただければ幸いです。